

中国宋代石造物の日本への影響

山川 均 (YAMAKAWA Hitoshi) 大和郡山市教育委員会

主な著書・論文

- ・『石造物が語る中世職能集団』(『日本史リブレット』29、山川出版社、2006年)
- ・『中世石造物の研究-石工・民衆・聖-』(『日本史史料研究会研究選書』2、2008年)

中国宋代石造宝篋印塔と日本の出現期宝篋印塔

中国宋代の石造宝篋印塔は、福建省泉州を中心とする地域から広東省北部にかけて集中的に存在する。日本の留学生(僧)が主に修学した浙江省寧波や天台山周辺には、宋代石造宝篋印塔の存在は知られていない。これらは11世紀中葉に出現し、12世紀中葉にかけて盛期がある。様式的には、錢弘俶塔を代表とする金属製宝篋印塔を忠実に模倣したものから、徐々に石造塔独特のやや簡略な様式に移行する。

一方、日本の初期宝篋印塔(石造)は、1230年代に出現する。その創製において、金属塔の石塔化(すなわち小型塔の大型化)という思想自体は、実際に泉州へ留学経験のある僧侶によってもたらされた可能性が高い。しかし、その形態や様式は、中国金属製宝篋印塔を日本的に翻案したものである。

中国の石造宝篋印塔は、金属製宝篋印塔を陶製などの台座(基壇)に載せた状態が石塔化されており、必ず台座(基壇)の表現があるのが特徴である。これに対し、日本の出現期宝篋印塔では金属製宝篋印塔が台座に載せられていない状態、すなわち金属塔単体のシルエットが採用されている。したがって台座(基壇)のある中国石造宝篋印塔は、それを欠く日本の石造宝篋印塔の直接のモデルとはいえ、ましてや、当時泉州周辺から石工が渡来したと考えることはできない。では、日本の中世石造文化のルーツはどこにあるのだろうか。

寧波東錢湖墓前石像群と東大寺石獅子

東大寺南大門に現存し、わが国の「宋風」石造物の代表格とされる石獅子2体は、建久7年(1196)に「宋人字六郎」ら4名の宋人石工によって、他の石像(大仏殿石脇侍2体と四天王像4体。いずれも戦国時代に兵火によって焼損)と共に制作されたものである。この際、石材は中国から巨額の費用をかけて輸入された(「東大寺造立供養記」)。この宋人石工の中に「伊行末」という石工が含まれていたが、彼の出身地は寧波であった(「大蔵寺層塔銘文」「般若寺笠塔婆銘文」)。

寧波東郊外の東錢湖周辺には、南宋朝廷で重きをなした史氏代々の墳墓が築かれている。そしてその墓前には、虎や羊、武士や文官などの石像が並べられており、中国石彫史上でも最高の彫技を示している。東大寺復興大勸進を務めた重源は、東錢湖から比較的近い位置にある阿育王寺と密接な関係を有しており、確実な渡宋記録のある仁安2年(1167)には、この東錢湖墓前石像群を実見した可能性が指摘し得る(「栄西入唐縁起」ほか)。東大寺復興に際し、重源はこの地から石工の一グループを招聘したのではないだろうか。

東大寺石獅子などの石像群は、前述のように中国産の石材で制作されている。石工の出身地が寧波で、かつ彼らが東錢湖墓前石像群の造立に関与していたとするならば、石獅子の石材は墓前石像群で主体的に使用されているものと同じである可能性が高い。そこで墓前石像群で使用されている石材(「梅園石」と呼ばれる硬質の凝灰岩)と東大寺石獅子の使用石材を複数の研究者が比較したところ、両者はほぼ同一の石種であることが判明した。

以上の諸要素より、東大寺石獅子などの石像群を制作した石工は、寧波東錢湖周辺で史氏など南宋朝廷における有力者の墓前石像群を制作していた一グループであった可能性がきわめて高い。彼らは東大寺復興に際して重源によって招聘され、その子孫は後に「伊派石工」「大蔵派石工」と呼ばれ、日本の主要な中世石造物の制作を手がけるようになる。すなわち、日本中世石造文化のルーツは寧波にあったのである。